

2021年9月26日 説教「わたしはいのちです」

ヨハネの福音書 14章 6、12～24節

今朝は 14章 6節の御言葉のまとめとなります。

### 1. 信じる者は (6, 12～14節)

①道、真理、いのち (6)「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のもとに来ることはありません。』」**「わたしが道」「わたしが真理」**に続いて、「わたしがいのち」について、12節以下を開きながら、考えていきたいと思います。

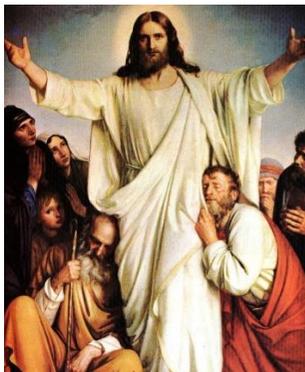
②信じる者は (12)「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行うわざを行い、またそれよりもさらに大きなわざを行います。わたしが父のもとに行くからです。」**「まことにまことに」**というのは元の言葉では「アーメン、アーメン」です。重要なことが語られる時に、主が用いられる表現です。主イエスを信じる者が、主イエスの行うわざを見習っていくことがまず伝えられます。そして、さらに主イエスが天に昇られることの予言に伴い、弟子達は主イエスの教えを受け継いでさらに広く、そのわざを行っていくことが述べられます。

③イエスの名によって (13～14)「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。」イエス・キリストの御名によって祈り求めることの価値が教えられます。その求めは用いられて答えられるというのです。「求めなさい。そうすれば与えられます」(マタイ 7:7) というお言葉をベースに、ヨハネ 15:7 の、主の御言葉をとどめて求める事とも相通じます。さらに 16:24にある「主の御名によって祈る」同じ響きです。ここでは、それは、父なる神が、御子イエス・キリストの御名によって祈り、応えられることによって、主のご栄光があらわされていくというのです。これはまた盲人の癒し時に言われた言葉 (9:3) や死んだラザロが生かされていった時に示された御言葉 (11:4) も想起されます。

### 2. 生きるために (15～20節)

①わたしの戒めを (15)「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」そして、主はさらに決断を促すお言葉を示されます。つまり、キリストを愛するなら、主の戒めを守るはずだといわれるのです。これは、21節以下にもつながります。

②助け主を (16～17)「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世は



その方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」キリストはご自身が十字架につき復活された後に昇天して本来あるべきところにもどられることを示唆されています。しかし、キリストはここで、そのようになって助けて主が来られることを教えられているのです。御霊なる神です。世の人々はその方をなかなか受け入れることができないとして、キリストの弟子達はその方を知っているとされます。信者のうちには御霊が宿っているのだと教えられているのです。

- ③孤児にはしない (18~20) 「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに戻って来るのです。いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるのです、あなたがたも生きるからです。その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたにおることが、あなたがたにわかります。」主は弟子達を孤児にはせず、戻って来られるといわれます。これは復活と再臨の両方を言われているのでしょうか。主が十字架で死によみがえらることによって、生きることの本質を教えられ、そのいのちを私たちにもあたえることを示されています。そして、それはキリストが父なる神と一体であるように、クリスチャンもキリストとひとつになっていくという希望を示されるのです。

### 3. 主を愛する (21~24 節)

- ①主を愛する人 (21) 「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。」15 節では、「主を愛するなら、戒めを守る」とあり、ここでは主の「戒めを保ち、守る人は、主を愛する人である」とあります。主の戒めを覚え、大事にし、行うように努めようとする時に、主は働いてくださるのです。そして、そのことは父なる神に愛されること同義であり、キリストによっても愛されて、主のみわざがそこに表されることになるのです。
- ②ご自分を現わす (22) 「イスカリオテでないユダがイエスに言った。『主よ。あなたは私たちにはご自分を現わそうとしながら、世には現わそうとなさらないのは、どういうわけですか。』すると、イスカリオテでないユダはタダイが問います。それは、私たちだけではなく、全ての世の人々に主の事を現わしたらどうかという要望でもありました。
- ③主のことばを守る (23~24) 「イエスは彼に答えられた。『だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人

とともに住みます。わたしを愛さない人は、わたしのことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のことばなのです。』ユダの問いに対する主イエスの答えは

主の御言葉を守ることによって、父なる神の愛を受け、主イエスと共に生きることになるのであって、世の人々がキリストを知るに至るためには、御言葉にふれ、神を知っていくことが重要だすることを主は述べられるのでした。

《結論》 「わたしは道であり真理でありいのちなのです。」というお言葉は、エ

ゴーエイミ (わたしは~である) のなかでも極めつけです。ある人が言いました

た。<自らを道だとか真理だとかいのちだとも言うのは、狂人かそれともそ

の言葉が真実であるかのどちらかだ>と。 今朝は主が「わたしはいのちです」

と言われた部分に注目しましょう。なお、ここで「いのち」というのは、ゾーウェ

ーという言葉ですが、「永遠のいのち」とも訳されています。

さて、ユダヤ人議会 (サンヘドリン) の議員であったニコデモという人が、ある晩のこと、イエス・キリストを訪問したのです。そして「先生。あなたは神のみもとから来られた教師でしょう。」とあいさつをしました。すると、イエスは「人は新しく生まれなければ神の国を見ることができません。」と言われたのです。ニコデモは驚き、「人は老年になっていて、どのようにして生まれることができるでしょう。もう一度母の胎に入ることなどできません。」と応えたのです。主は「肉によって生まれたものは肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」と言われ「風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くのかは知らない。御霊によって生まれる者はみな、そのとおりです。」(ヨハネ 3 章 1~8) と教えられています。

このニコデモの話からもわかるように、「いのち」について取り違えて考えるとなかなかキリストのお言葉の真意を受け取ることができません。つまり、イエス・キリストは私たちの魂に救いをもたらす「いのち」について、ニコデモにも語り、また「わたしはいのちです」というお言葉のなかでも語っておられるのです。ニコデモとの対話のまとめとして、ヨハネは「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(3:16) と記しています。小聖書とも言われる御言葉ですが、キリストを信じるのが、

この「いのち」にあずかる道であることが明言されているのです。

今朝の聖書箇所には、キリストを信じるということの具体的な道が記されています。つまり、12、15、21、23、24 節において、主の戒めを保ち、守ることが、主を愛するということの具体的な意味であると言われます。私たちは新約聖書において、律法的な生き方ではなく、福音的な恵み中心の生き方を学んでいます。ですから、戒めを守るというと抵抗感があるかもしれません。しかし、キリストを信じることは、キリストの教えられた御言葉を心に保ち、そこに生きようとする心が大切であることは確かなのです。つまり、私たちがこの肉体のいのちをもって生きる時に、食物をいただくことが欠かせません。食物は血となり生きる力となり、私たちの肉体のいのちを支える源です。それと同じように、霊的いのちを生きるためにも、霊的食物が欠かせないのです。キリストを信じて生きるということは、キリストの生ける御言葉を食していくことが必要なのです。キリストを信じ、愛することの具体的な意味は、聖書の御言葉をいただいて、それを守る。すなわち、栄養をたくわえて、生きることにあるのです。

「わたしはいのちです」と言われたイエス・キリストのいのちにあずかるためにも、その御言葉の真実をいただき、「霊的いのち」を喜んでいきましょう。